

日本語受動文の学習過程における母語—中国語の影響について

馮 富 榮¹ON INFLUENCES OF THE MOTHER TONGUE — CHINESE LANGUAGE
ON THE LEARNING PROCESSES OF JAPANESE PASSIVE VOICE

Furong FENG

This study was to investigate the influences of mother tongue as a second language acquisition. In survey I, three groups of Chinese who had been learning Japanese language for varying periods were asked: (i) to choose the appropriate passive voice markers, and (ii) to rate the naturalness of the Japanese passive sentences. The responses of each group were compared with those of 130 Japanese. In survey II, 101 Chinese were asked to rate the naturalness of Chinese sentences which were translated from the Japanese sentences of Survey I. The main results were: (i) the error rate in passive voice markers choice decreased as the learning years increased while ratings of naturalness remained relatively constant; (ii) In the sentences rating case, when the results of 101 Chinese were closely similar to Japanese, the profiles of mean ratings of each group showed similarity. Still, the mean ratings of the three Chinese groups were not only different from those of Japanese, but they were also negatively correlated. This study suggests that mother tongue has both promoting and interfering influences.

Key words: second language acquisition, influences of mother tongue, promoting influences, interfering influences.

問題と目的

第2言語学習における母語の干渉を検討する心理学的研究は、60年代から既にあった。たとえば、中島・佐伯(1968)は、日本人には英語における母音を伴わない子音が聞き取りにくいことを指摘した。また、芳賀(1963)と井上(1971)は、SD法を用いて、英語名詞の意味の日本人中学生・大学生と米国人大学生との間の差を検討している。その結果、日本人の捉えている英語名詞の意味が、米国人大学生のそれよりむしろ対応する日本語名詞の意味に近いことを見いだした。これらの研究は、第2言語学習過程における母語の影響を

示唆したものであるが、いずれも日本人の英語学習に関するものである。日本語学習に関しては、柏崎(1987)の研究などがあるものの、第2言語としての日本語学習過程における母語の影響を検討する心理学的研究はきわめて少ない。

日本語学習者の母語の多様性を考えると、一般的な議論を行っていくことが母語の影響に関する研究の少ない理由であろう。ところで、中国人の場合は事情が異なる。すなわち、中国国内はいうまでもなく、日本における中国人、あるいは中国語を第1言語とする学習者(香港、マレーシア、シンガポールなど)も非常に多いからである。木村ら(1989)の調査によると、中国での日本語学習者は数百万人にのぼっている。一方、日本語教育施設要覧(1990)によると、日本では、中国人だ

¹ 名古屋大学教育学部 (Department of Educational Psychology, Nagoya University)

け、または中国語を第1言語とする学習者だけを対象とする日本語学校が、41校あり、中国語を第1言語とする学習者が半数以上を占める学校をあわせると、231校にもものぼっている。さらに中国残留孤児への日本語教育も数か所で行われている。こうしたことを踏まえて考えると、日本語学習における母語としての中国語の影響を考察する研究の意義は大きい。

最近、中国語と日本語との比較研究は増加している。特に、中国人学習者にとって受動文学習の困難が大きいことから、両言語の受動文の相違を比較しようとする研究は多い。たとえば、張(1982)と蘇(1988)は、中国語から日本語受動文への翻訳法則を試みている。また、大河内(1972,1983)は、両言語の受動文の相違を幅広く検討し、さらに楊(1989)は、文法の面から両言語受動文における相違をまとめている。

これらの検討を要約すると、両言語の受動文には以下の相違点がある。

① 中国語では動作の主体が第1人称であるのは自然であるが、日本語では不自然である。たとえば、“ご飯は私に食べられた”という日本語は不自然であるが、その直訳の中国語は自然である。

② “紙は苺で染まっていた”のように、自然描写の場合、日本語では“染められる”より、自動詞の“染まる”を使ったほうが自然であるが、中国語では逆である。

③ “映画の主人公に感動した”という自発表現の場合は、日本語では能動表現を用いるが、中国語では受動表現を用いる。ゆえに、“感動された”のほうが中国語としては自然である。

④ 中国語では主語の所有物、主語に属するものを受動文の主語にするのは自然である。たとえば、“私の肩は先生に叩かれた”という意味の中国語は、普通である。しかし、日本語では“私は肩を”のほうが自然である。

⑤ 中国語の受動表現では動作の主体は無生物でいいが、日本語ではよくない。たとえば、“私の指はナイフに切られた”という日本語は、不自然であるが、それから訳された中国語は自然である。

⑥ “ドアは王さんに開かれた”という日本語は不自然であるが、そこから訳された中国語は自然である。つまり、両言語には相互に直訳できない受動文がある。

⑦ “足は”よりは“足を扉に挟まれる”のほうが自然であるように、能動文を受動文に変換するとき、日本語では、能動文の目的語がそのまま目的語となるが、中国語では、受動文の主語となる。

このようにして、比較研究は、両言語の受動文の相違点を細かく分析し、その構造を理解するのにおおいに示唆を与えてくれた。

しかし、こうした比較研究の成果は、現在のところ教育実践に生かされているとは言い難い。なぜならば、言語上の相違点と学習上の問題点とは別のことだからである。両言語の比較のみでは、さほど教育的な意味はない。言語上の相違点が学習上の問題点とどう関連するかを検討してはじめて、比較研究は教育実践に役立つものとなる。いわば、比較研究と誤用研究の連携が必要なのである。

最近、系統性をなしているエラーを検討することによって、教育実践に示唆が与えられるという見解から、誤用研究が増加してきている。しかし、現在行われている日本語教育に関する誤用研究には、ただ助詞のエラーか、用言活用のエラーかといった表面的な分類が多く、発達的に生じたエラーか母語の干渉によるエラーかという視点から、エラーの質的分類を試みるものは少ない。

東京外国語大学付属日本語学校では、共同研究として助詞に関するエラーを検討している。その結果、“日本語は、いろいろな学生の母国語から遠く離れているので、母国語による誤りの傾向ははっきりしていない”(吉川,1978)と結論づけている。しかしこの結論は、どこまで誤用研究に一般化できるかは疑問である。ここで問題なのは、助詞というものは、他の言語にはあまり見られず、日本語に独特なものだという点であろう。とすれば、母語の影響が少ないのは当然だと思われる。母語の干渉を強調する研究としては、佐藤(1982)のものがあげられる。しかし彼も、“修正しにくい原因として、母国語の影響が考えられる”と指摘しているが、母語の干渉については詳しく検討していない。

そこで、本研究は、中国語と日本語との受動文の相違点と共通点が中国人の日本語受動文の学習にそれぞれどのような影響を与えるか、また中国人の犯すエラーには如何なるものがあるか、さらにそのエラーの原因はどこにあるか、を検討しようとする。この研究は、中国人の日本語受動文の学習過程における母語—中国語の影響を考察することを目的としているが、それによって比較研究と誤用研究との連携を試み、学習エラーの質的分類を試みる。

日本語受動文の学習は、受身マーカー学習と構文文法学習からなっている。前者は、助詞“に”、“から”、“で”、“によって”のうち、どれが特定の受動文に適切であるかを学習することであり、後者は、どのような

文法構造を持った日本語受動文が自然であるかを学習することである。中国人が日本語受動文を学習するとき、前者は母語から影響を受けにくいので、そのエラーは学習年数と共に減少していくと考えられる。後者は中国語受動文の構文文法からの影響を受けやすく、そのエラーは母語の文法構造と一致している可能性が高い。ゆえに、容易には減少しない傾向があると思われる。

また、第2言語学習過程における母語の影響には、促進的影響と干渉的影響があると考えられる。たとえば、“人”という漢字は、中国語と日本語とでは同一であるので、“人”を学習するとき、中国人は西洋人より簡単であると判断できる。しかし、“いい”に相当する中国語の“好”は、肯定的な意味しか持たないので、断わる意に使う“いい”は中国人が学習しにくいことも馮(1989)によって指摘されている。つまり、母語の第2言語との共通部分は、その第2言語の学習を促すことになるが、相違部分はその学習を妨げてしまう可能性がある。ゆえに、中国人が日本語受動文の自然さを判断するとき、中国語受動文との共通項目においては日本人と類似する傾向、相違項目においては日本人と異なる傾向があると考えられる。

日本語と中国語の受動文に関しては、7つの相違点があるのに対し、以下の5つの共通点があげられる。

- ① “王さんは先生に叱られた”のように、受動文の主語が第1人称でない有情物である場合は、日本語としても自然であるが、その直訳の中国語も自然である。
- ② 受動文の主語が有情物でないが、有情物の工夫によって生産したものである場合、たとえば、“彼女の意見は上司に採用された”という文は、日本語でも中国語でも自然である。
- ③ “私は先生に叱られた”のように、動作の主体が有情物である場合は、両言語とも自然である。
- ④ “その作品は社会から認められている”のように、動作の主体が有情物でないが、ある集団などを意味する場合は、日本語も中国語も受動文に用いられる。
- ⑤ 他動詞の場合は、日本語でも、中国語でも受動文に用いることができる。たとえば、“弟は隣の人に殴られた”という日本語は、自然であるが、そこから訳された中国語も自然である。

中国人が日本語受動文を学習するとき、この5つの共通点よりも前述した7つの相違点でエラーを多く出すと予想される。

以上より以下の仮説が導かれる。

仮説1：受身マーカー学習は、母語から影響を受け

にくく、そのエラーは学習年数と共に少なくなる。他方、受動文の構文文法学習は、母語から影響を受けやすく、そのエラーは、学習年数が経っても、それほど減少しない。

仮説2：中国人が日本語受動文の自然さを判断するとき、両言語の共通部分においては日本人と類似する傾向、相違部分においては異なる傾向がある。

仮説3：中国人学習者は、日本語受動文の自然さを判断するとき、上述した中国語との5つの共通点より、7つの相違点においてエラーを多く生じる

調査 I

1. 目的

調査Iの目的は、学習エラーを、発達的に生じたものか母語の干渉的影響によるものかというように、質的に分類すること、中国人学習者が日本語受動文の学習のどこでどのように母語から影響を受けるかを考察すること、さらに、言語上の相違点が実際に学習上の問題点となりうるか否かを検討すること、の3つである。

2. 方法

被験者

G1：在日中国人の日本語学習者、20名(男性11名、女性9名)。中国で4年間日本語を専攻した後、平均5年2か月日本語の教師または日本語の通訳に従事した経験のある留学生で、日本語学習歴は平均11年、日本での滞在期間は平均2年3か月である。

G2：中国在住の中国人の日本語学習者、30名(男性11名、女性19名)。中国のある国立大学の日本語学部の3年生で、日本語学習歴は平均3年、日本での滞在経験はない。

G3：在日中国人の日本語学習者、21名(男性12名、女性9名)。ある日本語学校の就学生で、日本語学習歴は平均1年半、日本での滞在期間は平均1年1か月である。

GJ：日本人130名。そのうちある私立女子高等学校の3年生37名、ある国立大学の学生45名(男性17名、女性28名)、社会人48名(男性19名、女性29名)である。

質問紙Iの構成

2つの部分、AとBからなっている。Aは、日本語の文が自然か不自然かを判断してもらう部分で、36項目からなっている。そのうち、中国語の構文文法と共通する項目は10あり、項目番号は、1, 10, 11, 18, 23, 27, 29, 32, 35, 36である。残りの26項目は、中

国語の構文文法と相違するものである。このうち、6項目は、受動文ではないが、それは、両言語の受動文における相違点を明らかにするために設けられたものである。たとえば、項目5と34は相違点②、項目16は相違点③、項目10、19と30は相違点⑥を反映するものである。回答の方法は、“とても自然”、“すこし自然”、“どちらとも言えない”、“すこし不自然”、“とても不自然”の5段階の評定法であり、それぞれ1点から5点

までに得点化された。Bは、“に”、“から”、“によって”、“で”という4つの受身マーカーを選択する部分で、46項目からなっている。適当だと思われるものがあれば、複数選択を許した。

3. 結果と考察

Aの各項目の平均値と標準偏差をTABLE 1に、Bの各項目における受身マーカーの選択数をTABLE 2に示した。

TABLE 1 質問紙Aの結果(平均値と標準偏差)

No	項目内容	GJ	G1	G2	G3
		M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)
1.	昨日私は先生に叱られた	1.07(0.45)	1.00(0.00)	1.03(0.18)	1.04(0.21)
2.	私の肩は先生に軽く叩かれた。	4.39(0.84)	2.95(1.66)	2.80(1.27)	2.19(1.50)
3.	私は肩を先生に軽く叩かれた。	1.66(1.04)	2.40(1.69)	2.80(1.75)	3.00(1.54)
4.	窓は彼に開けられた。	4.53(0.78)	2.55(1.60)	2.66(1.64)	2.61(1.68)
5.	いちごを包んだ紙は赤く染まった。	1.36(0.82)	2.90(1.91)	4.00(1.28)	3.33(1.56)
6.	いちごを包んだ紙は赤く染められた。	3.73(1.30)	2.00(1.37)	1.66(1.24)	1.61(1.32)
7.	彼らの無理な要求は私達に断わられた。	3.64(1.35)	1.85(1.22)	1.76(1.27)	1.38(0.92)
8.	書棚の板は本によって曲げられた。	3.88(1.35)	2.40(1.39)	2.43(1.71)	2.57(1.59)
9.	贈物に手紙が添えられていた。	1.06(0.27)	4.05(1.43)	3.46(1.47)	2.90(1.70)
10.	贈物に手紙を添えた。	1.03(0.17)	1.00(0.00)	1.56(1.19)	1.66(1.11)
11.	彼女の意見は上司に採用された。	1.13(0.42)	1.25(0.91)	1.96(1.15)	1.04(0.21)
12.	足は扉に挟まれるところだった。	3.73(1.21)	1.90(1.51)	1.83(1.08)	2.76(1.44)
13.	足を扉に挟まれるところだった。	1.20(0.66)	2.90(1.80)	2.30(1.29)	2.47(1.60)
14.	指はナイフに切られてしまった。	4.80(0.48)	1.90(1.41)	1.70(1.17)	1.95(1.62)
15.	私はその主人公に感動された。	4.63(0.86)	2.25(1.58)	1.70(1.17)	1.85(1.42)
16.	私はその主人公に感動した。	1.13(0.40)	3.45(1.87)	3.03(1.60)	3.23(1.54)
17.	あの提案は私達に提出された。	2.93(1.51)	2.55(1.82)	2.20(1.27)	2.14(1.62)
18.	王さんは南開大学から講師に招かれた。	1.21(0.69)	1.30(0.92)	2.03(1.24)	2.19(1.2)
19.	ノートを見ているのを先生に見つけた。	1.23(0.52)	4.00(1.58)	3.06(1.38)	3.19(1.63)
20.	ノートを見ているのは先生に見つけられた。	4.78(0.61)	2.20(1.60)	1.80(1.18)	2.42(1.66)
21.	ノートを見ているのを先生に見つけられた。	1.58(1.02)	3.10(1.61)	2.16(1.26)	2.52(1.56)
22.	足はガラスに切られてしまった。	4.61(0.67)	1.65(1.34)	1.36(0.81)	2.00(1.48)
23.	その作品は社会から認められている。	1.24(0.61)	1.40(1.09)	1.63(0.96)	1.71(1.10)
24.	私は顔を虫に刺された。	1.17(0.59)	2.45(1.93)	2.43(1.71)	2.95(1.74)
25.	私の顔は虫に刺された。	3.14(1.47)	2.55(1.66)	2.33(1.18)	2.04(1.49)
26.	残したご飯は全部私に食べられた。	4.61(0.83)	2.35(1.81)	2.43(1.52)	2.09(1.37)
27.	あの荷物は張さんに送られた。	3.97(1.46)	4.35(1.13)	2.26(1.38)	3.38(1.56)
28.	あの荷物は張さんに送られていった。	4.43(1.05)	3.50(1.73)	1.60(1.00)	2.38(1.39)
29.	あの泥棒は近所の人に捕まえられた。	1.64(1.07)	1.70(1.34)	1.00(0.00)	2.14(1.71)
30.	あの泥棒は近所の人に捕まった。	1.43(0.94)	3.20(1.96)	3.66(1.24)	3.09(1.78)
31.	彼女の暖かい心に感動されてしまった。	4.44(1.05)	1.60(1.23)	1.70(1.11)	1.33(0.79)
32.	ここは山々に囲まれているのである。	1.10(0.41)	1.00(0.00)	1.40(0.96)	1.38(0.74)
33.	描いた絵はインクで汚されてしまった。	3.53(1.32)	1.55(1.14)	2.10(1.34)	2.38(1.68)
34.	描いた絵はインクで汚れてしまった。	1.13(0.51)	2.50(1.90)	2.50(1.59)	2.33(1.27)
35.	弟はとなりの子供に殴られた。	1.17(0.61)	1.00(0.00)	1.10(0.30)	1.09(0.30)
36.	その学説は学界に受け入れられた。	1.11(0.40)	1.75(1.33)	1.43(1.04)	2.04(1.35)

TABLE 2 受身マーカーの選択結果

No	項目内容	GJ				G1				G2				G3			
		から	に	で	によ って	から	に	で	によ って	から	に	で	によ って	から	に	で	によ って
1.	隣__二階を建てられた。	126		11		18	2	2		2	25	6		6	12	6	2
2.	作物が大雨__降られた。	126		2	3	20					22	5	5	2	13	7	3
3.	夕べ赤ん坊__泣かれた。	1	127		3	19		1		3	28		1	20			1
4.	人__椅子を取られた。	13	129		15	4	17	1	1	10	23			7	13	2	1
5.	傘を誰か__取られた。	5	129		10	20			1	1	28		1	1	21	1	1
6.	午前友達__来られた。		130			1	19				24	1	5	1	21	1	1
7.	家は泥棒__入られた。		130			20				1	27	5	3	1	21	1	1
8.	人__時計を壊された。	4	121		18	20			1	6	24	1		3	19		1
9.	人が車__ひかれた。		126	10	11	17	1	2			23	9	2	3	15	11	5
10.	李さんは人__殴られた。	35	120			20				1	28	1	1	2	21		
11.	泥棒は警察__捕まえられた。	1	106	3	57	19		4			27	1	3	1	20	1	4
12.	お母さん__秘密を知られた。	7	125		2	3	18			8	23		2	6	19	1	2
13.	李さん__本を取り上げられた。	19	118		13	5	14		1	17	15	2	4	5	19	1	2
14.	親__手を引かれて歩く。	1	128		3	1	20			9	22	1	2	3	18	1	
15.	社長__仕事を頼まれた。	108	96	1		18	11			19	18	3	2	6	18		
16.	陳さんは皆__尊敬されている。	123	70		2	11	16			8	27	1	1	4	20	2	1
17.	あの子が皆__嫌われている。	95	97	1	1	12	17			8	29	3	1	6	17	1	
18.	野村さん__多く教えられた。	81	92		6	12	13			18	14	2	4	12	15		
19.	父__試験の成績を聞かれた。	60	112		1	6	17			4	27			4	20	2	1
20.	弟は先生__褒められた。	62	125		1	5	18			8	28		1	3	21		
21.	友達__誕生日を尋ねられた。	89	108			13	13			8	22		1	6	17	3	1
22.	張さんは人__信用されている。	106	97		5	13	13			4	28	1	3	5	20	1	1
23.	知らない人__声をかけられた。	105	95			16	8			5	27	3	1	4	17	4	1
24.	彼は仲間__軽蔑されている。	121	75			11	14			7	26	4	1	6	18		
25.	私は父__叱られた。	29	127			20				2	30	1		1	21		
26.	誰__も信頼されていない。	122	66	2	2	11	13	1		4	24	7		3	20	3	
27.	大学__博士号を贈られた。	123	5	20	6	16	2	3	2	17	11	5	3	15	6	7	2
28.	文部省__仕事を依頼された。	123	58	5	1	18	5		2	22	12	3	2	10	10	3	3
29.	地元__称号を与えられた。	102	1	51	3	18	6	3	2	11	13	12	7	10	6	5	2
30.	母__父の詩集を見せられた。	111	63		7	17	5			17	11	1	7	14	7	2	7
31.	友達__映画に誘われた。	90	99			11	10			14	17	1	3	13	11	1	
32.	家の雑務__解放された。	129	4	1	1	20				30	1	1	2	15	6		
33.	友達__辞典を贈られた。	125	38		1	17	4			28	6	1	2	13	14		1
34.	張さん__花子さんに紹介された。	102	29		29	12	4		6	22	4	1	6	13	10		4
35.	秦さんは皆__選手に選ばれた。	102	38	1	41	8	8		5	15	12	3	6	10	5	4	4
36.	李さん__夕食に招待された。	86	88	1	2	11	9			12	12	3	5	10	14	2	1
37.	豆腐は大豆__作られたのだ。	122		9		15		7	3	22		15		13	3	9	2
38.	相手__土地を渡された。	112	32		1	11	9			11	16	2	2	6	13	1	5
39.	昔話は人々__話されてきた。	8	40		119	6	15	8	1	11	14	4	4	12	7		2
40.	彼らは信仰__救われた。	2	10	34	116	1	3	2	19	5	12	14	14	3	9	4	7
41.	それは前調査__発見された。	3	3	81	92			8	17	2	2	11	17		6	5	15
42.	平和も彼ら__破られた。	4	8	52	108	1		12	15		12	20	6	3	12	5	7
43.	これは李さん__設計された。		33	2	122		5		17	9	15	4	9	6	12	2	9
44.	中国は解放軍__解放された。	46	21		86	1	7		15	3	19	1	10	7	9	3	5
45.	病人は担架__運ばれてきた。	1	2	127	24			20	3	3	2	25		1	6	15	2
46.	美しい風景は美しい文体__描かれるべきである。	1	4	99	68			12	12	1	4	14	14	4	8	6	7
	無回答者数	GJ (3)				G1 (0)				G2 (15)				G3 (20)			

仮説1を検討するために、エラー数を計算した。Aの部分では、GJの評定平均値との差が1.95を越える反応をエラーとする²。Bの部分では、GJの130名のうち、選択者が4名以下しかなかった受身マーカーを中国人が選択した場合、それをエラーとする³。各グループのエラー率をFIG. 1に示した。

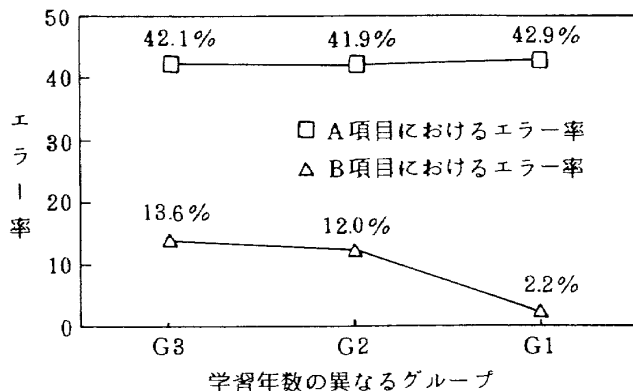


FIG. 1 個人の評定値で計算した各グループのエラー率

FIG. 1から分かるように、A項目のエラー率は、各グループとも高かった。分散分析を用いて、3つのグループ間の差を検定したところ、有意差は見られなかった($F(2,68)=.04$)。この結果は、受動文の構文文法学習は中国人にとって難しく、学習の年数が経っても容易にはマスターできないことを示している。これと対照的に、B項目におけるエラー率は、各グループとも低かった。各グループ間の差を検定したところ、グループ間の差が有意であった($F(2,68)=19.06, P<.01$)。Tukey法による多重比較の結果、G3とG1、G2とG1の間に、それぞれ有意差($P<.01$)があった。これは、受身マーカー学習は中国人にとって困難でないことを意味し、学習年数が経つに連れ、学習が進むことを示唆している。これが仮説1を支持する結果である。

しかし、A項目において、学習年数の長いG1が学習年数の短いG2とG3よりもエラー率が高い傾向があったのは、予想に反する。これは、恐らくG1のほうが長年日本語を勉強し、さらに日本語の教師、または日本語の通訳をしていたので、自分の日本語に自信を持っており、極端な値を選ぶ傾向があるからであろう。そのため、GJとの差が1.95を越すものが多くなったと考えられる。これとは反対に、G2とG3は、まだ自分の日本語に自信がないため、極端な値を

² 2を越えると、日本人と反対の傾向となるから。

³ 4人以下選択したものは、日本人の3%以下になるので、読み取り違いによるものであると考えられる。

避ける傾向があり、GJとの差が1.95を越すものは少なくなったと解釈できる。

この解釈を検討するために、中国人各グループ全体の評定平均値とGJの評定平均値との差を求め、エラー数を計算した。そこから得られた各グループのエラー率を図示したものがFIG. 2である。

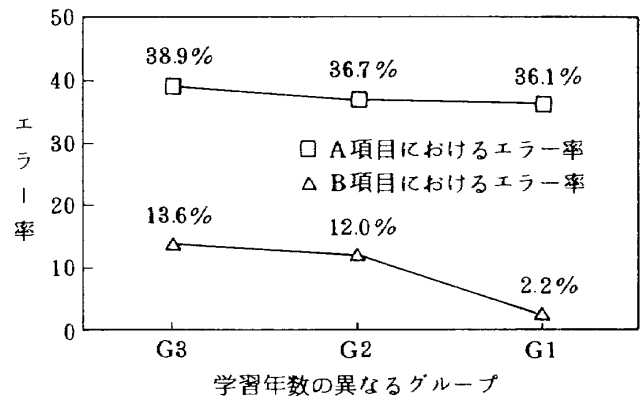


FIG. 2 グループの平均値で計算した各グループのエラー率

FIG. 2から明らかなように、学習年数の一番長いG1が一番エラー率が低かった。これは、上の解釈と整合的な結果である。また、TABLE 1からも分かるように、G2とG3の標準偏差が全般的にG1より小さかったのも、上の解釈を裏付けていると考えられる。

しかし、なぜ構文文法学習におけるエラーが学習の年数と共に減少しないのであろうか。もし上述したように、エラーの原因が母語の干渉に帰属できるとすれば、2つの可能性が考えられる。1つは、日本語受動文の自然さを判断するとき、両言語の共通するところで中国人は日本人と同じような傾向、相違するところで反対の傾向を出すことである。いま1つは、そのエラーは、両言語の相違部分に多く、共通部分に少ないことである。これが仮説2と仮説3の内容である。

仮説2を検討するために、Aを10の共通項目と26の相違項目に分けて、中国人グループごとにGJの評定平均値との相関係数を求めた。その結果、共通部分では、G1において.975 ($P<.001$)、G2において.521 ($P<.001$)、G3において.832 ($P<.001$)となり、3つのグループとも、GJと正の相関が得られた。

ただし、G1とG3に比べて、G2はGJとの相関が比較的lowかった。それは、恐らくG2が日本語受動文と接するチャンスが少なかったからであろう。彼らは、日本での滞在経験がなく、日本人から直接受動文をインプットされたことも少ない。ゆえに、母語で自然な受動文が、日本語となると同じように自然なのか

否かうまく把握できないのであろう。

共通部分とは対照的に、両言語の相違部分においては、G 1は $-.597$ ($P<.001$), G 2は $-.679$ ($P<.001$), G 3は $-.674$ ($P<.001$)で、いずれのグループもGJと逆相関を示した。ゆえに、仮説2は支持された。

ここで、興味深いのはG 3の結果である。G 3の大多数は日本に来てから日本語受動文を学習しはじめ、日本で日本人教師から日本語受動文を教わっている。インプットされた日本語受動文の大部分が正しいものであるにもかかわらず、GJと高い逆相関が出ている。

この結果は、学習者が単に受動的に教師から教えられたとおりに学習活動を行うのではなく、能動的になにか自分なりの学習方略をもって学習活動に臨んでいることを示唆するものと思われる。その学習方略には、今までの個人的な学習経験、学習理論など以外に、母語に関する既有知識があげられよう。3つのグループの被験者は、日本語学習歴においても、日本での滞在経験においても、また職業歴においてもそれぞれ異なっている。共通のものとして考えられるのは、中国語による既有知識である。もしこの3つのグループが、共通の中国語の知識をもって日本語学習に臨むとするならば、そしてもしこの共通の中国語知識が相違部分の日本語学習におおいに干渉しているとするならば、この3つのグループのGJとの逆相関は同程度のものになると予想される。実際、Pearson相関係数の同質性の検定法を用いて検定したところ、上の3つの相関係数の間には有意な差は見られなかった ($P<.8$)。

次に、仮説3を検討するために、エラー率をタイプ別に集計した。その結果はTABLE 3に示してある。“エラーの種類”とは、それぞれ、上述した両言語受動文における7つの相違点に対応するものである。“共通”は、両言語の共通項目に生じるエラーの合計であり、

TABLE 3 A項目におけるエラー数とエラー率^a

エラーの種類	G1		G2		G3	
	ERROR数	ERROR率	ERROR数	ERROR率	ERROR数	ERROR率
第1種	31	51.7%	38	42.2%	35	55.6%
第2種	59	59.0%	77	51.3%	55	52.4%
第3種	43	71.7%	61	67.8%	45	71.4%
第4種	32	40.0%	46	38.3%	45	53.6%
第5種	38	63.3%	66	73.3%	38	60.3%
第6種	47	58.8%	73	60.8%	41	48.8%
第7種	46	57.5%	50	41.7%	32	38.1%
共通	13	6.5%	41	13.7%	27	12.9%
相違	296	56.9%	411	52.7%	291	53.3%

(注) 個人の評定値からGJの評定平均値を引いて計算したもの。

“相違”は、相違項目におけるエラーの合計である。

TABLE 3から分かるように、3つのグループとも、相違項目におけるエラーは、共通項目より多かった。もちろん、エラーが多いからといって、相違部分の学習が困難であるとは限らない。しかし、平均で11年間日本語を勉強しているG 1すら高いエラー率を示したことは、両言語の受動文の相違部分の学習が中国人にとって難しいことを意味していると言えよう。

ところが、学習年数の長いG 1が学習年数の短いグループよりもエラー率が高かったのは、予想外である。これもG 1は他のグループより極端な値を選ぶ傾向があったことに起因すると考えられる。これを確かめるために、各項目における中国人各グループの全体評定平均値をとり、GJの評定平均値との差を求めた。そこから得られたエラー数とエラー率をTABLE 4に示した。

TABLE 4 A項目におけるエラー数とエラー率^b

エラーの種類	G1		G2		G3	
	ERROR数	ERROR率	ERROR数	ERROR率	ERROR数	ERROR率
第1種	1	33.3%	1	33.3%	2	66.7%
第2種	2	40.0%	2	40.0%	3	60.0%
第3種	3	100.0%	3	100.0%	3	100.0%
第4種	0	0.0%	0	0.0%	1	25.0%
第5種	2	66.7%	2	66.7%	2	66.7%
第6種	2	50.0%	3	75.0%	2	50.0%
第7種	1	25.0%	2	50.0%	1	25.0%
共通	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
相違	11	42.3%	13	50.0%	14	53.9%

(注) 各グループ評定平均値からGJの評定平均値を引いて計算したもの。

予想どおり、学習年数の短いG 3のエラー率が一番高かった。ともあれ、どちらの表の、どのグループの結果を見ても、共通部分より相違部分のエラー率が高いことが分かる。ゆえに、仮説3も検証された。

両言語の受動文に関する7つの相違点については、すでに述べた。その7つのカテゴリーの妥当性を吟味するために、各相違点を反映している項目間の相関を求めることにした。この際、各項目の評定値が高いほど日本人に近いと言えるようにするために、日本人の評定値の低い9項目(3, 5, 9, 13, 16, 21, 24, 30, 34)の評定値を逆転した。結果をTABLE 5に示す。

TABLE 5から分かるように、相違点④の4項目間の相関が有意 ($P<.001$) であった。他の相違点では、項目間の相関は有意でなかったが、相違点⑥以外には逆相関が見られなかったことから、各相違点を表わす項目間に一致が見られた。

TABLE 5 7つの相違点における各項目間の相関

相違1 $\alpha = .507$				相違2 $\alpha = .621$				相違3 $\alpha = .632$				相違4 $\alpha = .829$			
V7	V17	V26		V5	V6	V33	V34	V15	V16	V31		V2	V3	V24	V25
V7	.272	.209		V5	.505	.003	.414	V15	.642	.230		V2	.634	.472	.582
V17		.292		V6		.118	.140	V16		.171		V3		.589	.420
				V33			.537					V24			.617
相違5 $\alpha = .372$				相違6 $\alpha = .205$				相違7 $\alpha = .615$							
V8	V14	V22		V4	V9	V28	V30	V12	V13	V20	V21				
V8	.152	.004		V4	-.09	.230	-.056	V12	.472	.379	.178				
V14		.372		V9		-.101	.279	V13		.218	.253				
				V28			.100	V20			.226				

では、なぜ相違点⑥のところ、逆相関が出たのであろうか。それを吟味するために、逆相関の出た3つのペアを構成する項目の内容を検討することにした。

9. 贈物に手紙が添えられていた。(Jc)
 30. あの泥棒は近所の人に捕まった。(Jc)
 4. 窓は彼に開けられた。(Cj)
 28. あの荷物は張さんに送られていった。(Cj)

上述したように、相違点⑥は両言語相互に直訳できない文からなっている。それがさらにJcとCjに分けられる。Jcは日本語では自然であるが、その直訳の中国語は不自然である。CjはJcの逆である。上述した3つのペア、項目9と4、項目9と28、項目30と4の内容を吟味したところ、どのペアもまさにこの2つの内容からなることが分かった。ゆえに、逆相関が出ている相違点⑥も、相互に直訳できない点では、一致している。

さらに、各グループの評定平均値を検討したところ、Jcの項目においては、どのグループも不自然のほうに偏っていることが分かった。特にG1は日本語学習歴は11年に達するにもかかわらず、高い評定値をつけている。このことから、Jcの学習は、中国人にとって困難であることを察することができる。すなわち、母語で不自然な文が第2言語で自然な文となっていたとしても、学習者がそれを容易に受け入れない傾向があると言える。これとはやや異なり、Cjにおいては、項目28のG2の評定値のほか、中国語の自然から日本語の不自然への転移が少し見られた。それは、おそらく母語では自然な文であっても、第2言語では不自然となる場合は、その差異に比較的気づきやすいことを示唆しているのであろう。無論、僅かの項目では結論を下すには、不十分である。この点の詳しい検討が今後の課題である。

以上、母語の影響を中心にして3つの仮説を考察してきた。しかし、上の結果が出たのは、確かに母語、すなわち中国語の影響に起因するのであろうか。その点をさらに検討するために、調査IIを行うことにした。

調査 II

1. 目的

日本語受動文の自然さを判断するとき、中国人は、日本語より、むしろその日本語の中国語訳の自然さを基準にすると考えられる。調査IIの目的は、それを明らかにすることにある。具体的には次の仮説を検証しようとする。

仮説4：日本語受動文の自然さの判断において、中国人の評定値は日本人のそれより、むしろ対応する中国語への中国人の評定値に近い。

2. 方法

被験者

G4：中国人の留学生で、101名である。愛知県のある国立大学の留学生81名、愛知県内に在住する就学生20名である（男性59名、女性42名）。

質問紙IIの構成

質問紙IのAを中国語に訳したもので、36項目からなっている。項目順序も、回答の方法も、調査Iと同様である。

3. 結果と考察

調査IIの結果をTABLE 6に示す。

仮説4を吟味するために、5つのグループの評定平均値を比較することにした。5つのグループとは、調査IのG1、G2、G3、GJと調査IIのG4である。もし、G1、G2、G3の日本語への評定値がGJのそれより、むしろG4の中国語質問紙IIの評定値に近いならば、仮説4は検証されると考えられる。

TABLE 6 調査IIの結果(平均値と標準偏差)

No	項目内容	MEAN	SD
1.	昨天、我被老師批評了。	1.34	0.78
2.	我的肩膀讓老師輕輕地拍了一下。	1.96	1.27
3.	我讓老師輕輕地拍了一下肩膀。	3.68	1.42
4.	窗戶讓小王給打開了。	2.04	1.31
5.	包草莓的紙染紅了。	2.86	1.66
6.	包草莓的紙被染紅了。	1.47	1.02
7.	他們的無理要求已經被我們拒絕了。	1.14	0.35
8.	書架中間的木板讓書給壓彎了。	1.64	1.14
9.	禮物里边被添了一封信。	4.18	1.15
10.	禮物里边添了一封信。	1.52	0.92
11.	她的意見被上級所採納了。	1.81	1.26
12.	剛才、腳差一點讓門給夾了。	1.43	0.95
13.	剛才、差一點讓門給夾腳了。	3.47	1.51
14.	今天作飯的時候、手被刀切了。	1.32	0.73
15.	我被那主人公所感動了。	1.56	0.94
16.	我感動於那主人公了。	4.23	1.17
17.	那個方案是由我們提出來的。	1.16	0.63
18.	王先生被南開大學聘請為講師。	1.11	0.34
19.	考試的時候、作弊老師發現了、結果得了零分。	4.12	1.35
20.	考試的時候、作弊被老師發現了、結果得了零分。	1.42	0.97
21.	考試的時候、被老師發現了作弊、結果得了零分。	3.11	1.48
22.	腳讓泥中的玻璃給划破了。	1.32	0.68
23.	那部作品受到了社會上的承認。	1.53	1.04
24.	我被蟲子咬了臉。	3.09	1.54
25.	我的臉被蟲子咬了。	1.08	0.37
26.	你剩的飯、都讓我給吃了。	1.28	0.68
27.	那個行李被小張送去了。	4.12	1.11
28.	那個行李被小張送去了。	1.52	1.05
29.	那個小偷被附近的人給捉住了。	1.22	0.67
30.	那個小偷附近的人捉住了。	4.26	1.21
31.	我被她那溫暖的心所感動了。	1.47	0.96
32.	這里被山所環繞、交通非常不便。	1.67	1.07
33.	墨水洒了、好不容易画好的画被弄脏了。	1.29	0.73
34.	墨水洒了、好不容易画好的画脏了。	3.02	1.52
35.	弟弟讓隣居的孩子給打了。	1.39	0.85
36.	那個學說被學界所接受了。	1.51	0.90

まず、質問紙の項目を4つのカテゴリーに分類した。CJは両言語とも自然な文であり、cjは両言語とも不自然な文である。Cjは中国語では自然であるが日本語では不自然な文であり、cJはCjの逆である。もし、CJとcjにおいて、5つのグループ間に差がなく、CjとcJにおいて、G1、G2、G3の評定値がGJよりG4のそれに近いならば、仮説4は裏付けられることになる。各カテゴリーにおける各グループの評定平均値をFig. 3に示した。

各カテゴリーごとにグループ間の差を検定した結果をTABLE 7に示した。

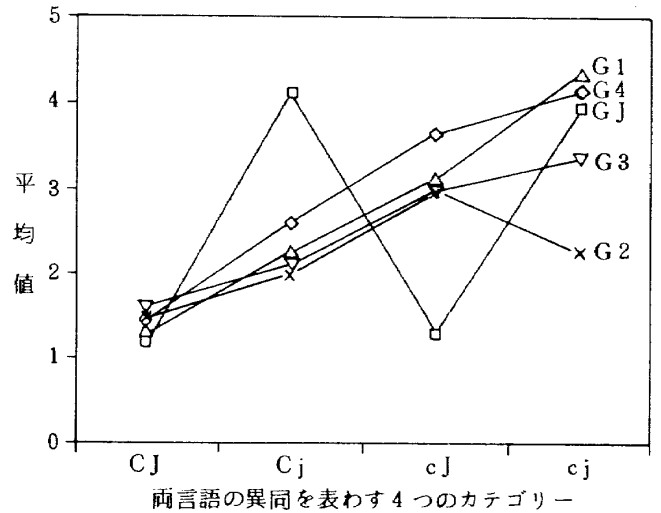


FIG. 3 各カテゴリーにおける5つのグループの平均値

TABLE 7 4つのカテゴリーにおける各グループの差の検定結果

	F	G1&G2	G2&G3	G3&G4	G4&GJ	G1&G3	G1&G4	G2&G3	G2&G4	G3&G4
CJ	14.97	***	***	***		***				
Cj	272.3	***	***	***	***		***		***	***
cJ	217.54	***	***	***	***		***		***	***
cj	13.27	***				***		***	***	

TABLE 7から分かるように、仮説4はおおむね支持されている。ただし、CJにおいて、G1とGJの間には差がないものの、G3とG1の間、G2・G3・G4とGJの間では、それぞれの差が有意であった。このことは、仮説4と一致しない。この原因としては、3つの可能性が考えられる。第1に、各グループのSDが小さく、そのため、差が有意になりやすかったことである。例えば、G1とG3の評定値の差は約.33で、大きな差ではないが、両方の標準偏差とも.35前後なので、有意になったのである。第2に、G1と違ってG2とG3は、まだ自分の日本語に自信がないため、あえて母語と違うように判断を行う傾向があったことが考えられる。第3には、翻訳の問題がある。翻訳者は3人とも天津の出身であり、天津では、受動文によく“給”と“所”を用いる。この“給”と“所”の使用の理由に、不自然と判断した留学生が何人もいた。たとえば、CJに含まれる項目11、35、36はその例である。このようにして、G4によるCJの評定値は、予想以上に不自然の側に偏ることになった。

Cjとcjに関しては、中国人の4つのグループともGJとの間に有意差があった。これは仮説4と一致する結果である。しかし、CjのところG4と中国人の他の3つのグループとの間にも差が出たのは仮説に反する。G4は、予想より不自然の側に偏っている。この原因も上述した翻訳の問題にあると考えられる。またcjにおいても、予想に反してG1・G2・G3とG4の差が有意である。この原因としては、2つのことが考えられる。1つは、中国語から日本語への転移が生じたことであり、いま1つは、前述のように、日本語に自信がないため、あえて母語と違う評定値を選ぶ傾向があったことである。ここでは、後者の可能性が高い。なぜなら、GJとの差が最も大きいのがG1であり、11年間日本語を学習したこのグループの被験者が、学習歴の短いG2とG3よりも転移が少ないとは考えにくいからである。

仮説4は、cjにおいても支持されている。しかし、G2が他の4つのグループと有意に異なっている点は、仮説に反する。G2は日本での滞在経験がない。彼らは、自分の日本語に一番自信がないため、“外国語だから、とにかく母語と違うだろう”という発想から、あえて母語とは反対の評定値をつけた可能性がある。しかし、G4とGJの間に差が出なかったことから、cjが両言語の共通性を反映する項目であることが検証されている。ただし、この点については、さらにcjの項目数を増やして、確認する必要がある。

ここで、Cjとcjが両言語の相違性を反映する項目からなることが実証できたことは、重要な意味を持っている。なぜなら、これが実証できない限り、中国人学習者が両言語の相違部分において、日本人と反対の傾向を示す仮説2も、エラーを多く生じる仮説3も、真の意味においては、実証できたとは言えないからである。

全体的討論と今後の課題

本研究は、2回にわたる調査によって、日本語受動文の学習過程における母語—中国語の影響に関する4つの仮説を検討してきた。

調査Iの結果に基づいて仮説1を検討したところ、日本語受動文の受身マーカー学習におけるエラーは学習の進行に伴って減少するが、構文文法学習におけるエラーは、減少しないことが明らかになった。ゆえに、仮説1は検証された。そして、構文文法学習エラーが学習年数と共に減少しない原因は、母語の文法構造からの干渉にある可能性が指摘された。そのようなエ

ラーは、母語の文法構造にあっているもので、気づかれにくく、訂正もされにくいであろうことが示唆された。このようにして、この研究は、第2言語を学習するとき、エラーの修正のしにくい原因の1つは、母語の干渉にあることを示した。

仮説2の考察により、第2言語の母語と共通部分の学習には母語による促進的影響があり、相違部分の学習には干渉的影響があることが確認された。特に、日本で日本語受動文を教わったG3の学習者にも、両言語の相違部分で日本人と反対の傾向が見られた。これは、学習者は必ずしも教授されたとおりに日本語学習を進めるとは限らず、教授活動から独立して、自分なりの学習方略をもって日本語学習に臨む可能性を示していると思われる。さらに、日本語学習歴、日本での滞在経験などの背景を異にしている3つのグループとも、相違部分における評定値がGJのそれと、同程度の逆相関を示すことも確かめられた。これは、自分なりの学習方略には3つのグループの共通に持っている母語による知識体系が働いていることを示唆している。

調査Iの結果からは、両言語の受動文の共通部分より、相違部分にエラーが多いことが分かった。ゆえに、仮説3も裏付けられた。仮説3の検討によって、両言語の受動文の相違点がすなわち中国人の日本語受動文の学習の問題点であることが確認され、比較研究と誤用研究の連携を試みた。さらに、両言語の相違点をJcとCjに分類したところ、Cjより、Jcの学習が中国人にとって困難であることも示唆された。つまり、母語では不自然な文は日本語では自然な文となっていたとしても、学習者は、それを容易に受け入れない傾向が見られた。

調査IIから、中国人日本語学習者の日本語受動文への評定値は日本人のそれより、むしろ中国人の同じ意味の中国語への評定値に近いという結果が得られた。ゆえに、中国人学習者は、日本語受動文の自然さを判断するとき、日本語受動文の構文文法よりは、むしろ中国語受動文の構文文法に従う傾向が確認され、仮説4は検証された。そこで、調査Iから得られた3つの結果、日本語受動文の構文文法学習におけるエラーが学習年数と共にそれほど減少しなかったことも、両言語の相違項目においては、日本人と逆相関が出たことも、エラーを多く生じたことも、母語の干渉的影響に起因するものであることが実証できた。

まとめて述べると、この研究は、第2言語としての日本語学習過程における母語の影響を指摘し、その影響を実証するための心理学的研究を試みた。また、中

国語と日本語の受動文における相違点がすなわち中国人の日本語受動文の学習の問題点であることを確認した。これによって、比較研究と誤用研究の連携を試みただけではなく、中国語を第1言語とする学習者の日本語受動文の学習の問題点も日本語教育者に提示した。ゆえに、この研究は、比較研究の成果を教育実践に生かすための有効な示唆を与えたと思われる。

今後の研究課題としては、以下のものがあげられる。

① 両言語の受動文における共通点と相違点の分類には問題点が残っている。つまり、分類の妥当性について、再検討の必要がある。

② 両言語の受動文における言語上の相違点と学習上の問題点との関連について、より詳しく考察する必要がある。具体的には、学習の問題点とならない言語相違点はあるのか、また各相違点による母語の干渉は同程度なのかといった点についても検討する必要がある。

③ このような研究がどこまで日本語教育実践に役立つものかを実験的に考察することも必要である。

引用文献

- 馮 富榮 1989 日本語の習得に関する調査的研究 名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学論集, 19, 37—47.
- 芳賀 純 1963 日本人学生の学習した英語名詞の意味構造の比較研究 教育心理学研究, 11, 33—42.
- 井上正明 1971 英語名詞の内包的意味に関する因子分析的研究 教育心理学研究, 19, 13—25.
- 柏崎秀子 1987 発話者の心的態度からみた助詞「は」と「が」の使い分け 教育心理学研究, 35, 57—64.
- 木村宗男・阪田雪子・窪田富男・川本 喬 (編) 1989 日本語教授法 桜楓社
- 中島 誠・佐伯 治 1968 日本語・英語の比較研究に基づく英語教育法に関する研究: II 教育心理学研究, 16, 1—15.
- 日本語教育振興協会 1990 日本語教育施設要覧 日本語教育振興協会
- 大河内康憲 1972 中国語の受身 講座日本語学, 10, 外国語との対照 I, 319—332.
- 大河内康憲 1983 日・中の被動表現 日本語学, 4, 31—38.
- 佐藤洋子 1982 誤用例からみた表現指導の問題 講座 日本語教育, 18, 50—66.
- 蘇 琦 1988 試論被動句漢譯日的規律 日本語学習与研究, 5, 33—35.
- 王 秀珍 1985 被動句中表示補語的幾個格助詞 日本語学習与研究, 4, 90—91.
- 王 志国 1987 關於被動句的助詞問題 —兼同有関学者商討— 日本語学習与研究, 6, 25—29.
- 楊 凱榮 1989 文法の対照的研究 —中国語と日本語— 講座・日本語と日本語教育, 5, 312—340.
- 吉川武時 1978 誤用例による研究の意義と方法 日本語教育, 34, 15—20.
- 張 正立 1982 談談日語被動句的一些譯法 日本語学習与研究, 4, 43—45.

謝 辞

本稿の作成にあたり、暖かい御指導を頂いた名古屋大学の梶田正巳教授・村上隆助教授・諸先輩に心より感謝致します。

(1993.3.10受稿, 8.12受理)